



大阪・新今宮で、外国人観光客向けの観光インフォメーションセンターを運営するなど、ユニークな活動で知られる、阪南大学国際観光学科。来年4月から、国際観光学部として、新たにスタートを切るこの学科で、学生の指導にあたられているのが松村嘉久先生です。今回は、このようなゼミ活動を始められたいきさつや活動の内容などについて、お話を伺いました。



阪南大学 国際コミュニケーション学部 国際観光学科 教授 **松村 嘉久**さん

地域と観光のあり方を考えつつ 問題解決のプロセスを身につけてほしい



TICに対応に追われる学生たち。
「この間教えてもらった場所がとても
楽しかった」とリピーターも多い





フィールドワーク(実践)を重視した国際観光学

国際観光学とは、主にどのようなことを研究する学問ですか。

軸になっているのは、「観光文化」

「観光計画」「観光事業」の3つです。

「観光文化」は、各地の文化資源を活用する方法を考えると「観光計画」は、まちづくりなど地域社会を活性化する方法を考えると「観光事業」では、観光の経済的な役割やこれからの観光のあり方を考えるというものです。これらをまんべんなく学ぶことで、10年先、20年先を担える人材を育てようとしています。

特徴を挙げるならば、フィールドワーク。これに尽きます。教室の中だけの授業では限界があるんです。とにかく現場を見ることが大切です。座学だけではどうしても追いつかない。

経験の裏づけの無い知識は、基本的に役に立ちません。ゾウを見たことのない人に、ゾウがどんなものか説明しても、イメージってわからないでしょう。逆に、知識の無い経験というのも、す

ぐに頭打ちになってしまいます。経験と知識のどちらが大事かと問われれば、経験が先にきたほうが、学びを深めるきっかけにはなりやすいと思っています。

ゼミの学生を中心とした

観光インフォメーションセンターを運営

観光インフォメーションセンター

とはどんなところなのでしょう。

大阪・JR新今宮駅前にある観光インフォメーションセンター(Tourist Information Center、通称TIC)は、バックパッカー等の長期滞在型外国人観光客を主な対象とした案内所です。近年、この界隈かいわいの簡易宿泊所はガラガラになっており、外国人のバックパッカーを呼び込むことで、顧客の確保と街の活性化を図る、という計画が練られました。そして実際に、外国人が訪れるようになったのです。

私たちのゼミでは、まず、簡易宿泊所のホームページ立ち上げに協力、外国人に対応できる飲食店などを掲載した周辺地図を作成しました。その後、

メニューの多言語化(英語・中国語・韓国語)も手がけ、今年7月から、TICをスタートさせました。

活動されている学生は、語学も堪能なのですか。

ゼミ生は、全員が全員、語学が堪能というわけではありません。TICでは、基本的に6人体制で、学生を配し、必ず2人は英語か中国語を話せるメンバーを入れていきます。外国語に自信があるわけではないメンバーも、それぞれコミュニケーションをとろうと努力しています。その姿勢が大切。

実際、TICを運営していると、外国人とのやりとりは、自然と多くなります。また、TIC発の街歩きツアー「Let's walk around OSAKA」というものも実施していますので、参加してくれる外国人には、説明をしないといけないシーンは多くあります。

学生も必死ですから、いざとなると、何とかするための力が湧いてくるようです。そして、語学力はもちろん大切ですが、話せるだけでは、現場では通用しないんだな、ということもわかっ

学びたいことから選ぶ大学
学部・研究室レポート
大学の学部・研究室の「今」を紹介します。



できます。例えば、大阪から奈良へ行きたいと言われても、奈良までのルートを知らなければ、教えることができません。英語ができるイコール伝えられる、というわけではないですね。

また、学生たちは、TICにいます。ただではなく、いろいろなことをしています。先日は日本語がわからない旅行者のつもりで日帰り旅行をするというフィールドワークを行いました。これにより、外国人が旅行をする際に、どんな障害があるかがわかるのです。日本語の表示しかない場所、インフォメーションセンターの位置、乗り換えのしやすい駅とにくい駅等。それを把握していれば、案内の仕方も変わりますし、街の中の変えていかなければいけないところも見えてきます。

例えば、標識にローマ字のふりがながあつたほうがいいな、程度ですけれど。ただ、ここにはめんどろな問題もあるのです。この場所は市の管轄、こちらは府、ここは消防……、だから公的機関に頼ろうとすると、なかなか話が前に進みません。とにかく待っていてもらちが明かないことが多いので、

地域のやる気のある方々や、学生と教員、動ける人間が一丸となつて、活動をしはじめています。実態ができ、動きが大きくなれば、行政もそれを無視できなくなりますからね。

ところで、どうして新今宮という場所だったのですか。

1998年に、大阪市が野宿生活者の実態調査を行いました。当時大学院生だった私は、その調査に携わり、それがきっかけで、あいりん地区との関わりができたのです。野宿生活者があふれていた状態は、2002、3年には落ちてきてきましたが、簡易宿泊所を利用する労働者は減り、空室が目立つようになりました。

かといって、あいりん地区に、新たに日本人が入ってくることは、現実問題として難しかった。だから、来てもらうなら外国人しかないという話になったのです。私自身、バックパッカーとして旅した経験がありますから、「大丈夫」という実感がありました。要するに、偏見に満ちた日本人は怖がるかもしれませんが、外国と比べたら、何て

Let's walk around OSAKA

外国人個人旅行者向けの大阪街歩きツアー

「Let's walk around OSAKA」

学生たちがツアー内容を企画し、ディープな大阪の街を紹介。

中でも結婚式の行われる住吉大社などが外国人には人気。



大阪平野・杭全神社の夏祭り



移動中は語学力を高める場でも



住吉大社にて



YOSHIHISA MATSUMURA



・・・先生からのMessage・・・

自らの身体で学んだ経験は次の学びにつながります。

ことないんです。いきなりピストルが出てきたりは絶対しませんから(笑)。

現在、新今宮界限には、88軒の簡易宿泊所があり、1軒あたり100室くらいの部屋があります。つまり部屋数が多いので予約なしで来ても、どこかで泊まれるんです。安く連泊してしっかり観光したい外国人にとっては価値のある話で、ゲストハウス街として十分機能するんですよ。

外国人の旅行者が増えるにつれ、日本人の宿泊者も来るようになりました。これは当初からの目的でもあったのですが、外国人が宿泊してくれることで日本人の偏見もとけてきたのです。人が循環することで地域の活性化にも役立つ。観光政策としてもなかなかうまくいっていると思います。

学ぶのは問題解決のプロセス
「動ける人間」になるように

積極的に活動されているゼミ生の将来像はどのように描いておられるのでしょうか。

今、学んでいること、取り組んでい

ることが、そのまま職業につながるというの、少し難しいかもしれません。このあたりん地区で働く人になるわけではないですからね。

私が学生に見てほしいのは、今行っている活動の骨格です。どこに就職しようとも同じです。身近で何か問題があるときに、動かすべきことがわかり、動ける人になってほしい。

だから、何か問題を解決しなくてはいけない事案がある会議には、意識して学生も連れて行きます。そこで、ひとつのことを動かすプロセス、どういうアプローチでどう人脈を作るのかを学ぶわけです。そして、学んだら、派生して別のことにも応用できるようにしてもらいたいですね。

では、読者である保護者の方に、子どもが「動ける人」になれるためのアドバイスをお願いします。

いちばん大事なのは本当に遊ぶことです。ゲームなどではなく、山に入つて川で泳いだり。ただ、現実問題はなかなか難しくなっているのも承知しています。最初にお話しました「経験と

プロフィール

大阪府出身。1984年、大阪市立大学文学部史学地理学科(現・人間行動学科)入学。1995年、大阪市立大学文学部同学科卒業。1999年、大阪市立大学大学院文学研究科にて人文地理学を専攻し博士号(文学)取得。2002年より、阪南大学国際コミュニケーション学部 国際観光学科にて教鞭をとる。「観光地理論」のほか、フィールドワークの手法など、実践的な学びに重点を置いた講義を行う。2009年7月、阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科の学生とともに、大阪・新今宮にて観光インフォメーションセンターの運営をスタート。



知識」の経験がどんどん減ってきてしまっているんです。大人になってそれを補えればいいけれど、補えないケースも多いでしょう。だから幼い時の、人間の根本を形成する時期に、そういう経験ができればいいと思います。価格面や休日の制度など環境を整えないと難しい部分もあるかもしれませんが、田舎のほうへ出かけて、することを決めずにゆったり、ゆとりを持って遊ぶ等、やってみていただければいいと思います。